

石原由貴

森光洋

安楽大輝

佐藤優太郎

岡田莞助

沖野凌可

中嶋友哉

[http://lab.kenrikodaka.com/event/2018d\\_KSJ](http://lab.kenrikodaka.com/event/2018d_KSJ)

頭部をすっぽんと抜く  
(Head popping illusion)  
脚を長く伸ばす体操  
(Elastic legs illusion)  
手紙の錯覚  
(Paperized hand illusion)  
重力反転  
大車輪計画  
軟体生物ヘッド  
(Soccer ball head illusion)  
ボディエクト指向  
Finger stick illusion  
蟹の錯覚対戦  
(iPad Version)  
Self-umbrelling  
(Siggraph Asia 2018 Version)

からだは戦場だよ 2018Δ (デルタ)

やながせ倉庫・ビッカフェギャラリー

2018.12.22-23, 2019.1.12

「からだは戦場だよ」は、小鷹研究室がすすめる「からだの錯覚」のプロジェクトの成果をいちはやく発表する場として、2014年から毎年冬にビッカフェで開催している展示です。5年目となる今年のテーマは「ボディエクト思考法」です。ボディエクトはボディとオブジェクトを組み合わせた造語であり、研究室の近年の関心（いかにして身体を半ばモノのように体感することができるか？）を象徴的に顕す表現でもあります。

「身体を半ばモノのように体感すること」がいかにかに難しいかは、自分の手をまじまじと眺めてみればすぐにわかるはずです。僕たちは、「身体」という特別な魔法の担い手に全権を委譲するのと同じく、身体」という牢獄の中に閉じ込められかえる空間から永遠に疎外され続けているのです。身体を半ばモノのように体感する」というのは、「身体」を剥いだ先にひそむ何「モノ」かに対する感度を回復するということであり、その先には複数的な変態に開かれた新たな自分の風景が見えてくるはずです。そして、その段階に達するためには、極めて手続的な呪術が必要とされるのです。

「からだは戦場だよ」の立ち上げから5年が経とうとしませんが、戦場の目指す風景は確実に届くべき人に届きつつあります。戦場の成果物は一見すると芸術的関心からかけ離れたところにある単なる心理学の装置のようにみえますが、これまでに多くの芸術畑の方々の関心を惹きつけてきました。実際、今回ゲストとしてお呼びする三人は、それぞれ美術や批評の方面で活躍されている方ですが、過去の戦場に一度は来訪されています。今回の企画を通して「からだは戦場だよ」と「芸術」の二つの装置を共有したいと考えています。

過去2年の戦場の展示物の多くは、まず岐阜ビッカフェで初めて披露された後に、国内外の大きな舞台での展示や受賞へと結びついていきます。今年も、例年と遜色のない不気味なトーンで新たな体験をお送りできるようにしたいと考えています。

12.22 (土)

錯覚体験展示 (新作中心)

13時

→ 20時

1ドリンク

1000円  
(1ドリンク)

トークセッション (17:00-20:00)

「幽体離脱の芸術論」の射程距離

12.23 (日)

13時

→ 18時

1ドリンク

展示・イベント  
タイムライン

1.12 (土)

錯覚体験展示 (旧作数点)

13時

→ 19時

1ドリンク

500円  
(1ドリンク)

レクチャー (15:00-18:00)

からだの錯覚、日常にひそむ異界の風景

岐阜市・やながせ倉庫  
ビッカフェ



岐阜市弥生町10

090-3308-6309

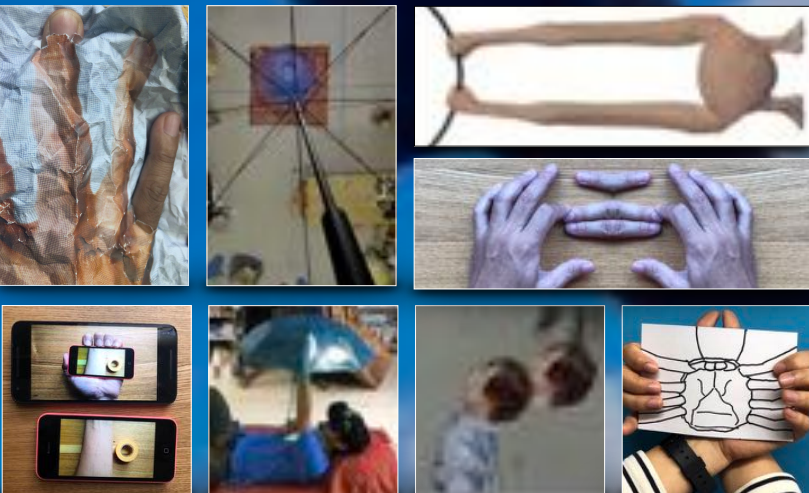


## 錯覚体験展示

ビッカフェ・  
ギャラリー

『からだは戦場だよ』の本体である錯覚体験展示では、小鷹研究室が考案する「身体の伸縮感覚」「重力反転・幽体離脱」「皮膚の素材感覚の変調」「頭部着脱感覚」などの錯覚を体験できます。また、例年同様、HMDを使ったVR体験装置も多く揃えています。

第1部(12月22-23日)では今年度卒業生の新作を中心に、第2部(1月12日)では、前回の展示『からだは戦場だよ2018』で発表され、その後、国内外で高い評価を受けることとなった2点の旧作VR (Elastic Arm Illusion & Self-umbrelling) を体験できます。



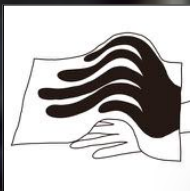
小鷹研究室

lab.kenrikodaka.com

『からだの錯覚』を中心テーマとして標榜している、日本で（おそらくは）唯一の研究室。研究テーマは、幽体離脱（重力反転）、身体の伸縮感覚、セルフタッチ、影・鏡・イラストによる所有感の変調など多岐にわたる。昨今、目まぐるしく刷新を繰り返すバーチャル・リアリティー（VR）技術を積極的に導入し、「具体的に体験可能なインタラクション装置」のなかで設計された一見すると異質な「からだ」のリアリティーを、様々な尺度で検証する。

近年の主なVR関連の発表に、腕が伸びる体験装置「Stretchar(m)」(UNITY Award in EC2017, Siggraph Asia 2017) / 「Elastic Arm Illusion」(Finalist in VR Creative Award 2018)、幽体離脱体験装置「Recursive Function Space」(Siggraph Asia 2017) / 「Self-umbrelling」(Siggraph Asia 2018) など。

2015年より、冬に研究室展示『からだは戦場だよ』をやがせ倉庫・ビッカフェで毎年開催。2016年、岐阜駅でワークショップ『おとなのからだを不安にさせる13のワーク』、2017年には名古屋科学館『さわってビックリ！見てフシギ？人間の皮膚』に参加。



# 特別企画

2018.12.22(土) 17時-20時

ビッカフェ

トークセッション

「幽体離脱の芸術論」の射程距離

古谷利裕 × 金井学 × 小鷹研理

『からだは戦場だよ』の5周年を記念し、本展示と深い関わりを持つ「幽体離脱」をめぐる諸問題を、芸術全般の言説空間で長きにわたって確かな存在感を示す画家・評論家の古谷利裕と、国内外の各地で横断的な制作を展開しているアーティスト・金井学の2人のゲストを迎えて議論します。

古谷利裕は、近年「幽体離脱」をキーワードに、フォーマリズムの立場から芸術論を更新する構想（「幽体離脱の芸術論」）を表明しています。先日「KRITS」に発表されたその序章的論考「幽体離脱の芸術論」への（助走）

では、哲学・人類学・文学・美術などの各種の実践事例を引くとともに、『からだは戦場だよ2018』での自身の体験がとりあげられています。

本トークでは、古谷氏の同論考を呼び水として、『からだは戦場だよ』の試みが「芸術」という名の人類学的営為といかにして共振するのか、その可能性を、技術哲学を援用することで、モダニズムの美術理論を芸術実践の側から批判的にアップデートすることを企図している金井学を導き役として探って行きます。

2019.1.12(土) 15時-18時

レクチャー

ビッカフェ

共催：これからの創造のためのプラットフォーム

sozoplatform.org/

からだの錯覚、日常にひそむ異界の風景

小鷹研理（講師）× 前林明次（聞き手）

アート・デザイン・思想・暮らし・地域等の様々な領域の実践者の知見に触れながら現代社会を考察する、IAMAS・前林明次が主宰するプロジェクト「これからの創造のためのプラットフォーム」のレクチャーを、『からだは戦場だよ』に合わせて、今回初めてビッカフェで開催します。講師は『からだは戦場だよ』を主宰する小鷹研理が務めます。

当日は、その場で簡単に体験できるいくつかの錯覚を紹介しながら、現代において「からだの錯覚」の問題を探究することの意義について多岐にわたる議論が展開されます。

近年、場所にと根ざした身体的リアリティの問題を探る小鷹研理と、そのデイスカッションの時間を持ちます。

からだの錯覚に付帯する「不気味さ」や「きもちわるさ」、あるいは「わぞわ」といった感覚は、自分という名のシステムの組成が組み変わるにつれて、そのサイエンスです。



画家・評論家

古谷利裕

d.hatena.ne.jp/furuyatoshihiro/

1967年神奈川県生まれ。1993年、東京造形大学卒業。主な展覧会に「VOCA展2002 ー新しい平面の作家たちー」（上野の森美術館、2002、東京）、「組立」（masui R.D.R gallery、2008、埼玉）、「アートプログラム青梅2011」（青梅美術館、2011、東京）など。著書に『世界へと滲み出す脳』（青土社、2008）、「人はある日とつぜん小説家になる」（青土社、2009）、「虚構世界はなぜ必要か？」（勁草書房、近刊）、共著に『映画空間400選』（INAX出版、2011）、「吉本隆明論集」（アーツアンドクラフツ、2013）、「半島論 文学とアートによる叛乱の地勢学」（響文社、2018年）がある。



金井学

アーティスト

www.terrainvague.info

1983年東京生まれ。2015年に東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻を修了。近年の主な展覧会に「行為の編集」（2018年、トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京）「パラタクシス、日々の暮らし」（2016年、フリーマントル・アートセンター、西オーストラリア）「トランスプレゼントネス：発明とアンドロギュノスの時間」（2016年、メルボルン大学、メルボルン）「複数のものごとのための原器」（2014年、A-things、東京）など。2015年-16年メルボルン大学付属研究所 The Centre For Ideas 客員研究員（ボラ美術振興財団助成）、スロバキア、カナダでの滞在制作等、異なる複数の場やディシプリナリティを横断しながら「芸術という営為」の生成の次元を探索している。



前林明次

メディアアーティスト

身体と環境のインターフェイスとして「音」をとらえ、人と場所との関わりへの想像力を喚起する作品制作を行っている。また2014年から、現代社会における「創造性」を幅広い見地から考察するレクチャー・シリーズ「これからの創造のためのプラットフォーム」(sozoplatform.org)を主催している。これまでの作品・展示には《Sonic Interface》(1999-)、《Container for dreaming》(2011-)、《OKINAWA NOISE MAP》(2016-)、《場所をつくる旅》(2017)などがある。現在、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教員。



小鷹研理

twitter.com/kenrikodaka

1979年生まれ。名古屋大学芸術工学研究科准教授。認知心理学・Virtual Reality・メディアアートを横断する複合的な視点に立ち、「からだの錯覚」に関わる諸問題を、具体的な装置を通して構成的に検証する小鷹研究室を主宰。